



MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

11

1998.9.30



富士吉田 あれこれ

吉田のつきあい

私たちが社会生活をしていく上で人とのつきあいは欠かせないものです。つきあいにもいろいろありますが、山梨県下で今でも特徴的にみられる「無尽」を通して吉田のつきあいを紹介します。

無尽は昔は金融組織としてムラ社会の生活に欠かせないものでした。ムラのなかである家がまとまったお金(家の新築、改築、結婚等)を必要としたときに、その人が発起人となって同族や隣近所十数軒に呼びかけて無尽を組織しました。無尽はお金を必要とする家を会場として行われ、集めたお金を最初に受け取ります。次回以降は入札あるいは抽選によって受取人が決まり、最終的に出資者全員にお金が回って無尽は完結します。

無尽はムラ社会のなかで人助けの意味を持ち、人が寄り集まることで構成員どうしの親睦を深め、そのつながりをより強固にすることに役立ちました。昔の無尽はいわば経済相互援助の役割とともに社会的側面を持っていたと言えます。

現在、無尽の金融機能的機能は本来の金融機関に肩代わりされ、ほとんど失われましたが、一方で親睦団体的要素はますます濃厚になって受け継がれています。

現在の無尽は一般的に「貯金会」「同期会」「積み立て」等と呼ばれ、定期的集まってお金を集めるのですが、そのお金は積み立てておき、最終的にゴルフをしたり、旅行に行っ

たりするのに用いられています。そして無尽の会場も飲食店が中心となり、会合の内容も飲食や歓談に重点が置かれています。つまり、現在では金融行為そのものよりも、集団で飲み食いをするこのほうが大きな目的となっているのです。

このように本来の無尽とは名称も意味合いも異なっていますが、吉田では老若男女問わず現在も盛んに無尽が開かれています。(市内の飲み屋の数が人口に対して異常に多いのもそのせいかも知れません?) 無尽の集まりを幾つも抱える人も多く(5~10の掛持ちは当たり前)、給料日には無尽にかけのお金のため、お小遣いがなくなってしまうという笑えない話もよく聞きます。また、これとは逆に無尽に一つも入っていないという人は友達がいないとか変り者と言われることもあるようです。

無尽を組織するきっかけは職場に同じ年に採用されたとか、PTAの役員や消防団を同じ時期に務めたとか、職場や社会生活で同じ集団に属したことを契機に結成されることが多いようです。つまり、日常生活においてきっかけはどこにでもあり、それが掛持ちの数が増える一つの理由と言えます。

多過ぎるつきあいも大変だと思いますが、ひょっとしたら吉田の人たちは寂しがりやなのかもしれません。

▼博物館レポート

新倉の歴史を探る(前)

はじめに



【新倉地区航空写真】

富士吉田市の中西部にあり、御坂山地(新倉山)の山すそに沿うようにして位置する新倉地区は、現在浅間町・新町・旭町・赤坂の4地区からなっています。これらの地区は、標高が770mから800mの所にあつて、西側は山を境に河口湖町と接し、東側は下吉田地区と接しています。また、西側の山を背にした少し傾斜のある場所に立地していることから日当たりが良く、冷涼な富士吉田市の中にあつて比較的暖かな地域でもあります。新倉地区内にある池之元遺跡は縄文時代早期から平安時代までの複合遺跡ですが、この遺跡の存在は、この地が古くから人の住みやすい地域だったことを証明しているといえるでしょう。ただ、そうした人々の暮らしもその後の度重なる富士山の噴火で一時期途絶えることもありました。富士山の噴火によって流れ出た多量の溶岩は市内の各所を埋め、新倉地区も10世紀頃に流れた溶岩流(剣丸尾溶岩流)によって、ごつごつとした不毛の地となりました。新倉

のうち、現在の新町・旭町の二地区はこの剣丸尾溶岩流の台地上にあります。これは近世以降の溶岩台地の開拓によって形成された新田村落です。そして現存する史跡に、富士山の噴火と溶岩台地の開拓に密接に関わったものが多いのもこうした歴史的背景があつたからとも言えるでしょう。

本稿は、この新倉地区を取り上げ、地区の成立とそこにある史跡や文化財の由来などを2回に分けて紹介していきます。私たちの住んでいる一地域の歴史、そうした身近な歴史を知ることは、郷土全体の歴史を理解する上でも必要不可欠なことであり、また、あまり意識されてこなかった史跡の本来の価値を理解する上でとても重要なことと言えます。

今回のレポートが、私たちの身近にある貴重な史跡をもう一度見直すきっかけとなり、地域の歴史に対する興味と文化財の保護の意識をあらためて持っていただけるようになるならば幸いです。

富士山の噴火
と
剣丸尾溶岩流

霊峰富士と呼ばれ、円錐型をした美しい富士山は古くから神の宿る山として信仰の対象となってきました。しかし、かつての富士山は活火山としてしばしば噴火を繰り返し、荒ぶる神の山として恐れられてもいました。富士火山が発生したのは今から約10万年前～7万年前頃と推定されており、現在の様な美しい円錐形の火山となったのは今から約2,600年前から2,200年前頃と考えられています。

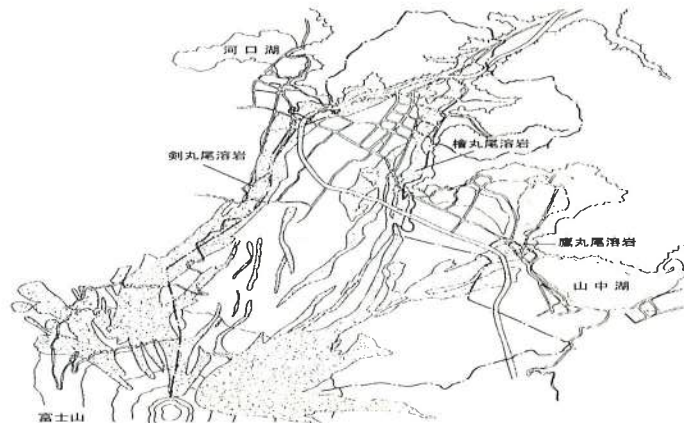
富士山の噴火についての記録が文献にあらわれるのは『続日本紀』の天応元年(781)の記事が最初で、次いで『日本紀略』の延暦十九年(800)、延暦二十一年(802)にみることができます。これらの記録は駿河や相模の国のものですが、当時富士山の噴火は単なる自然現象ではなく、神の祟りや不吉な前兆としてとらえられ、占いによって災害から逃れるすべが講じられていました。

甲斐国側からの記録は、貞観六年(864)『三

▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(前)

代実録』の記事にみえますが、この時の噴火はかなり大規模なもので、溶岩流は本栖、セの両湖水を埋め、さらに河口湖へと流れ、その間人々に大きな被害を与えたとあり、当時の惨状が伝えられています。またこの噴火で「セの海」と呼ばれた大きな湖は溶岩流によって埋められ、「西ノ海」から転じて現在の西湖となったと言われます。この貞観の大噴火を朝廷は、占いの結果駿河の浅間明神に奉仕する神主たちが祭祀を怠ったせいであると判断し陳謝するよう命じました。そして翌年には、甲斐国にも浅間明神を祀る神社を建立するように命じています。このことから貞観の大噴火の激しさをうかがうことができます。

新倉地区が位置する溶岩台地は剣丸尾と呼



【溶岩図】

池之元遺跡

池之元遺跡は、御坂山系の南端部、嘯山東麓のテラス状に張り出した緩やかな台地上の斜面、新倉字池之元付近に位置しています。この遺跡からは今から約 8,000 年前の縄文時代早期の遺構が発掘され、この頃には既に人が住んでいたことが確認されています。この縄文時代早期はそれまで続いていた氷河期が終わり、気候の温暖な、また富士山の火山活動による影響の少なかった時期でもありました。

現在遺跡の周辺は宅地化が進み、当時の状況をうかがうことはできませんが、台地の西側には通称「小溝の水」と呼ばれる湧水があり、台地の下には字名のもとになった湿沼の痕跡が残っています。南向きの斜面で日当たりも良く湧水など水にも恵まれた環境は、当時の温暖な気候とあいまって人々の暮しに適

ばれていますが、この丸尾と言う言葉は、溶岩がころころと転がる様子、その「転ぶ=まろぶ」という言葉から転じたと言われてます。剣丸尾溶岩流は、その下から出土した遺物やC¹⁴年代(放射性炭素年代)からみて10世紀頃に流出したものと考えられています。そして、『日本紀略』の承平七年(937)の記事にも富士山の噴火が記録されていることから、この時に流れたものと推定されています。この剣丸尾溶岩流は、山頂火口から2kmほど北、高度2,900mの山頂下の急斜面から流出し、現在のスパルライン沿いに流下して富士急ハイランド、下吉田第二小学校、同第一小学校、福源寺、富士見町と通過し、富士小学校から福昌寺まで流れています。



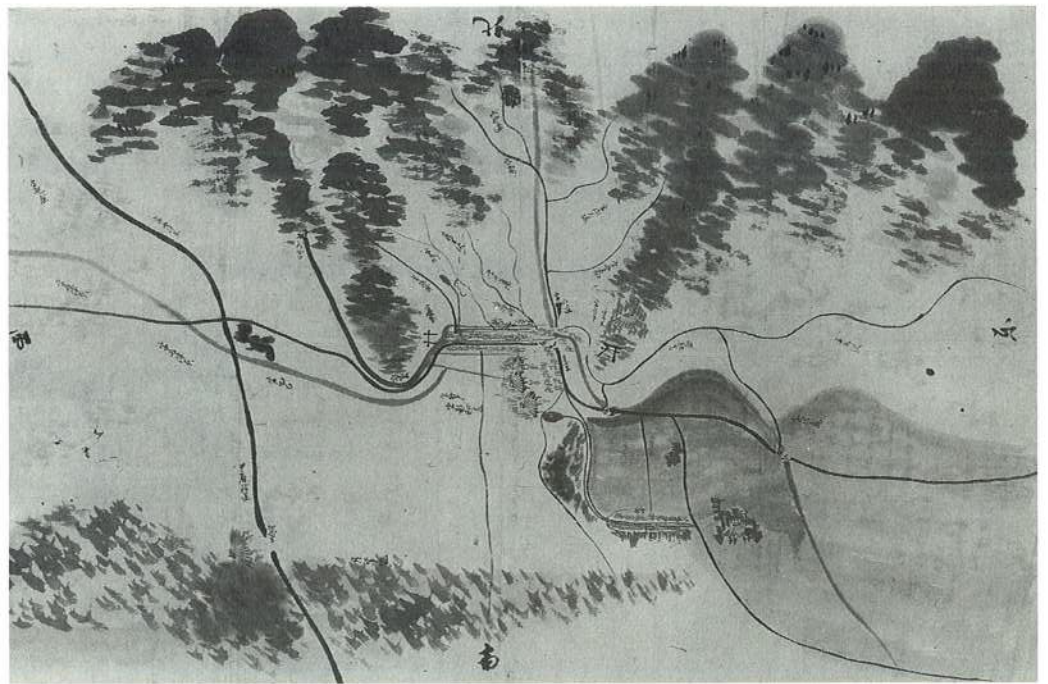
【池之元遺跡】

▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(前)

新倉村の成立 と 新田開発

3,500年前)の住居址2軒が検出されました。検出された住居は地面を掘り下げた竪穴式のもので、その中の一つは入口から炉にかけて床に石を敷き詰めた敷石住居となっていました。そしてこの住居からは3点の急須の様な形状をした注口土器をはじめたくさんの遺物が発見されています。

池之元遺跡では縄文時代早期から平安時代までの遺構が確認されていますが、このことから見てもこの地が市域の中にあつて、特に生活しやすい自然環境に恵まれていたことがうかがえます。



【新倉村絵図】

新倉村と呼ばれる集落は当初、尾垂山から流れ出る入山川沿いの今の浅間町付近にありました。この辺りは、西と北側を山で囲まれた東南向きの斜面であるため日当たりの良い場所でもありました。

この新倉という地名は「荒倉」「荒蔵」としてすでに『妙法寺記』『勝山記』といった中世の記録に記されていました。そして文禄三年(1594)の検地帳には「新倉村」と記されており、この頃には行政上一つの村になっていたことがわかります。

また、この地名に関する言い伝えに、平安時代まだ富士山が頻繁に噴火していた頃、富士を訪れた弘法大師が噴煙のあがる空を見て「あら、暗い」と言ったことから新倉の名がついたとも伝えられています。貞享三年(1686)新倉村の人々は入山川下流の小舟山の土で

剣丸尾を開発して新屋敷を形成しました。そしてここを新町組、旧集落を古屋敷組と呼ぶようになりました。その後、享保十三年(1728)には、新倉山の山崩れにより古屋敷組の一部が流失したため、南西の剣丸尾上を開発して新田組としました。この二度の新田開発により新倉村は、古屋敷・新町・新田の三組により構成されることになったのです。

新倉村の新田集落は、溶岩台地を開発してつくられたため水に乏しく畑作が中心でしたが、慶応元年(1865)新倉掘抜の完成などにより新たに水田が開かれていきました。明治八年(1875)新倉村は隣接する下吉田村と合併し瑞穂村となりました。戦後、古屋敷、新町、新田はそれぞれ浅間町、新町、旭町と呼ばれ現在に至っています。

▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(前)

年号	石高	田反別	畑反別	戸数	人数	出典
文禄3年 1594	147石5斗2升	1町1反7畝25分	29町7反7畝10分	(47)		検地帳
寛文9年 1669	247石6升6合	7町7反23歩	32町5反2歩			検地帳
享保15年 1730	275石8斗1升9合	7町7反23歩	49町4畝17歩	129	820	高反別指出明細帳
宝暦9年 1759	275石8斗1升9合	7町5反5畝17歩	49町1反1畝9歩	194	839	高反別指出明細帳
文化年間 1804～17	285石7斗5升5合			229	944	甲斐国志
天保2年 1831	285石7斗5升5合	68町4反3畝6歩		254	1,093	高反別指出明細帳

【近世新倉村の耕地面積と人口の推移】

地蔵堂

この地蔵堂は富士吉田市と河口湖町との境界に建てられたもので、現在地蔵堂は河口湖町地番になっています。かつてこの辺り一帯は剣丸尾溶岩流によりごつごつとした溶岩の原野が広がっていました。そして戦国時代この地は甲斐(国中)の武田氏・駿河の今川氏・相模の北条氏、そして当時の郡内領主小山田氏の勢力の接点であり、しばしば戦場となっていました。『妙法寺記』『勝山記』には、永正十四年(1517)の正月、武田方についていた小林尾張入道が荒蔵(新倉)に出陣して吉田城山に陣取っていた駿河の今川勢を攻めたということが記されています。堂の中に祀られている地蔵は丸尾地蔵とも呼ばれ、永禄二年(1559)に武田信玄が戦死した人々の霊を慰めるためにここに安置したと伝えられています。そして、この地蔵堂の周辺には「信玄築地」と呼ばれる当時の防備施設と思われる溶岩を積み上げた石垣があり、それは昭和の

初期まで残っていました。地蔵堂の向かい側に最乗塔という石塔が建っていますが、この塔は天明年間(1781～89)に船津田通寺の僧台岩が、この溶岩原野での戦死者や天明の飢饉での餓死者を弔うため、石にお経を書いて埋めたことを記念して建てたものです。



【地蔵堂】

*次回は、新倉掘抜や新倉三カ寺などの史跡を紹介していきます。

主な史料及び参考文献：
 『富士吉田市史』資料編第1巻 自然・考古、第2巻 古代・中世、第3巻 近世Ⅰ、第4巻 近世Ⅱ
 『池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市史資料叢書 14
 『新倉の民俗』富士吉田市史民俗調査報告書第6集
 『山梨県史』資料編1 原始・古代 1
 『甲斐国志』「甲斐叢書」10～12巻

<当館学芸員 齊藤 智子>

▼活動報告

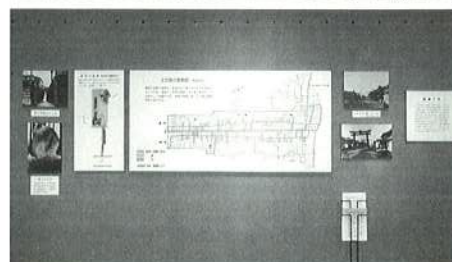
企画展・博物館講座

企画展

●「吉田の御師
—御師の仕事と暮らし—」

7月1日(水)～8月27日(木)

当博物館の展示テーマのひとつである「富士山信仰」をより深く理解していただくため、今回、「吉田の御師—御師の仕事と暮らし—」と題した企画展を開催いたしました。吉田の御師の歴史は古く、文献からもその活躍を知ることができますが、御師の実態は必ずしも明らかになっているわけではありません。本展では、富士山の信仰を広めた吉田御師の仕事や日常生活に関する資料を展示し、展示品を通して御師の信仰上の役割や多面的な性格を紹介しました。



●「縄文土器作り教室作品展」

9月1日(火)～9月13日(日)

8月2日・9日・23日の計三回に渡って実施した博物館講座「縄文土器作り教室」に参加していただいた皆さんの作品30点を展示しました。どの作品もみな力作ぞろいで、世界に一つしかない自分だけの縄文土器を広く一般の方々にも見ていただきました。同時に、縄文土器作成方法のパネル展示や実際に縄文土器を作る皆さんの生き生きとした写真を通して、参加者以外の方にも考古学に対する理解と興味を持っていただけたのではないかと思います。



●「山梨の遺跡展 97」

9月15日(火)～10月25日(日)

山梨県では毎年数多くの遺跡発掘調査が行なわれています。この企画展では平成9年度に県内の各地で発掘された遺跡を、出土した遺物や写真、パネルなどを交えて紹介しました。この展示を通して、県内における最新の研究成果を知ることができるのみならず、発掘調査が少なく、遺跡を身近に見る機会の少ない市民の皆さんに、考古学という分野を理解していただく良い機会になったのではないのでしょうか。



博物館講座

● 歴史散歩

「新倉の歴史と自然を探る」

6月7日(日)

今年の歴史散歩は市街地に目をむけ、自分たちの身近にある歴史や文化財、そして自然を再発見してもらおうと市内新倉地区を中心に散策してみました。

富士急ハイランド駅を出発し、新倉掘抜、池之元遺跡、新倉浅間神社、そして忠霊塔で昼食をとり、新倉三ヶ寺を回り、下吉田駅で解散という約7,8km道のりを34名の参加者が集まりました。

当日は小雨のパラつくあいにくの空模様で気温も低く、特にお昼のお弁当は震えながら食べたものでしたが、誰一人リタイヤすることなく歩きとおすことができました。



【新福寺址】



【正福寺の経堂】

● 体験学習

「縄文土器作り教室」

8月2・9・23日(毎週日曜日)

この講座は、市内の遺跡から出土した縄文土器をモデルに、当時と同じ方法で土器を作ることによって、縄文時代の人々の生活、文化、技術を実体験として学んでいただき、郷土の歴史に対する理解と関心を深めていただくことを目的としています。全3回の行程で、粘土作り、土器の成形と文様付け、野焼きを行ない、参加者全員割れることなく完成することができました。そして今回初の試みとして、23日の野焼きには、縄文時代の衣装を身につけて当時の状況をよりリアルに演出して



【縄文時代の衣装で土器を焼く】

みました。皆さんには、土器を焼く炎とともに約4,000年前の縄文時代へタイムスリップしたような、そんな気分を味わっていただけたのではないのでしょうか。

博物館実習

8月14日(金)から27日(木)までの2週間、当館において3大学4名の博物館実習生が学芸員資格取得のため学んでいきました。

- ・都留文科大学—平出 正章・高木 伸明
- ・筑波大学—武井 基晃
- ・教賀女子短期大学—加藤 瞳



【実習風景】

▼Information

博物館からのお知らせ

平成9年度
寄託・寄贈
資料

昨年度に博物館へ寄贈していただいたこの地域に関する貴重な資料を紹介します。ご協力ありがとうございました。

- 寄託—
「襖絵」他 高村 君
- 寄贈—
「石仏」 渡辺 不智子
「一升枧・膳・鍋」 荒井 玉男
(受入順・敬省略)



【千手観音像】

次回の
企画展

●『電気がなかった時代の生活用具』

平成11年1月19日(火)～3月22日(月)
富士吉田市域における電気の普及は、大正から昭和初期で、桂川の水を利用した水力発電によるものでした。それ以降電気は私たちの生活になくはならないものとなっています。しかし、電気がなかった頃の生活は今よりずっと不便なものだったのでしょうか。

今回の企画展では、電化される以前の生活用具を展示し、当時の人々の生活を理解していただくことによって、電気に依存している現在の生活をもう一度考え直す機会としていただければ幸いです。

臨時休館のお知らせ

●博物館では貴重な資料をカビや害虫から守り、永年にわたって保存していくために毎年燻蒸作業を行っています。燻蒸期間中は閉館となりますのでご了承ください。

燻蒸休館期間

平成11年1月4日(月)～11日(月)

編集後記

今年度の人事異動で、学芸係に異動してきて以来、毎日毎日が慌ただしく過ぎて行き、気が付くと秋風の吹く頃となっていました。異動してきてもうすぐ半年。感じたことは、学芸の仕事は多種多様、知力体力ともに必要で、仕事量も半端じゃない。しかも少数精鋭ときているから、みんなで一致団結一生懸命。

そんな訳で、この編集後記も(FU)に代わって書くことになりました。まだまだ仕事も半人前で学たま(学芸員のたまご)の私ですが、一日も早く一人前の学芸員と言われるようがんばっていく所存ですので、今後ともよろしく!

(SA)

ご案内

開館時間 午前9:30～午後5:00 (入館は午後4:30まで)
休館日 月曜日(祝日を除く)
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)
12月28日～翌1月3日

観覧料

大人 300円(240円)
小中高生 150円(120円)
()内は20名以上の団体料金

交通案内 ●中央自動車道河口湖ICより車で10分。
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス15分、サンパークふじ下車。



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1
TEL. 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665
E-mail marubi@mfl.or.jp
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005
富士吉田市 ホームページ URL
http://www.cliy.fujiyoshida.yamanashi.jp/rekishi/hakubutu.html
発行 平成10年9月30日